法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

法政大学図書館一〇〇年史 ： 第一編 図書館通史 ： 第九章 三キャンパス体制への対応 二、工学部図書館の歩み

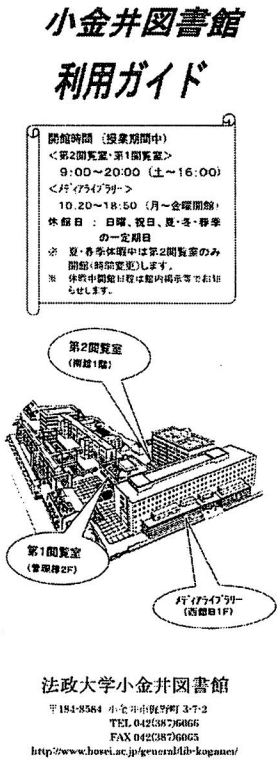
兼子，修一

(出版者 / Publisher)
法政大学図書館
(開始ページ / Start Page)
258
(終了ページ / End Page)
261
(発行年 / Year)
2006-03

Hosei University Repository

二、工学部図書館の歩み

（1）工業専門学校から新制工学部へ



工学部の前身である航空工業専門学校が創設されたのは、一九四四年（昭和一九）四月である。国家的要請を背景に開設された専門学校であったが、敗戦という大きな時代変化の中で、一九四五年（昭和二〇）一〇月、工業専門学校に改編された。

Hosei University Repository

授業は川崎木月の予科校舎を使用していたので、予科学生の復学に伴ない施設が手狭となったため一九四七年（昭和二二）四月、千葉県習志野に移転した。場所は津田沼駅から五キロ程入った荒涼たるところで、陸軍施設払い下げの旧騎兵学校校舎を購入したものであった。木月時代の機械科と電気科に、新しく建築科を増設して出発した。ここに開設された図書館は、津田沼分室と称された。

一九四八年（昭和二三）に入ると戦後の学制改革が実施された。本学でも工学部昇格に向けての大変な努力がはらわれ、この過程で教員の増員、設備の充実がはかられた。この年本学に吸収合併された石岡の旧筑波工業専門学校（石岡分室）からも図書を移転するなどの申請準備作業が行われた。しかし、七月申請の結果は保留とされ、昇格認可が下りるのは翌一九四九年（昭和二四）の再申請を待つことになる。その際、幾つかの条件が付けられたが、その前提が富士見校舎への移転計画であった。

一九五〇年（昭和二五）四月には、機械工学科、電気工学科、建設工学科、経営工学科の四学科からなる新制工学部が富士見の六角校舎等の一部を借用して開設された。しかし、工業専門学校の在学生が残っていたため、その授業が習志野の校舎でもつづけられた。そして、最後の卒業生を送り出したのは、翌一九五一年（昭和二六）三月のことであった。こうして、航空専門学校から七年という専門学校の短い歴史は終焉した。習志野の校舎の廃校に伴ない、図書館津田沼分室も同様に廃止となり富士見の本館に引き上げられた。

現在の小金井図書館には、航空専門学校時代からの蔵書が一部残こされているが、津田沼分室が所蔵していた図書資料は約六、四四〇冊であった。この図書資料は、その後富士見、麻布、そして小金井へと移転していくことになる。

Hosei University Repository

（2）麻布校舎と図書館麻布分館の利用

工学部設置認可の条件の中には、工学部専用校舎の建設、さらに図書の追加補充のことなどが指摘されていた。そのため富士見校地に新校舎の建設が一旦は計画されたが実現には至らず、二年後の一九五二年（昭和二七）麻布三の橋にあった麻布校舎（別名三の橋校舎）に移転することが決定された。この前年、中央労働学園大学を吸収合併し、本学社会学部の授業が行われていたが、その校舎を共同使用するというものであった。

図書館麻布分館は一九五一年（昭和二六）八月に開設された。場所は校舎の二階端で、閲覧室の広さは二十一坪五十席であった。初代分館長は社会学部逸見重雄教授である。移転当初は前年度から川崎木月校舎で一年次生の授業を行っていたので、麻布での授業は二年次生からであった。しかし、一貫縦割り教育の必要性が強く叫ばれ、一九五三年度（昭和二八）からは、一年から四年までの一貫教育が麻布校舎で実現する運びとなった。この時の工学部の学生数は、昼間七九七名である。工学部は、第一工業高等学校と一緒に移転したのだが、加茂正雄文庫一万冊、本館所蔵の工学関係図書四五三冊が麻布分館に移管され補充された。

この年、富士見校地に大学院棟（五三年館）が完成し、人文系学部を集中させる大学の方針に基づき、社会学部が一九五五年（昭和三〇）四月に富士見校舎に移転した。この結果、麻布分館は工学部の図書館となり閲覧室も後に見るように拡張された。しかし、財産目録の作成が終了した協調会文庫六万冊が五月に移設されたため、麻布に残った図書資料は工学関係を中心に見劣りするものとなった。工学部の初代分館長には千葉茂太郎教授が就任した。

Hosei University Repository

（3）麻布分館の蔵書拡充

不足する麻布分館の蔵書の充実を図るため、特別図書購入費の注入、石岡分室からの工学関係図書の移管、工学部図書予算の増額などの措置が取られた。この図書館充実の努力は、一九五六年の蔵書が、図書七、九三八冊、雑誌五四タイトルであったものが、一九六二年には図書一万四二九〇冊、雑誌三〇六タイトルという数字となって表われた。予算は、四六万七〇〇〇円から二一〇万円に飛躍的に増額されており、一九五二年に新設された「後援会文庫」予算の二〇万円を合わせると二三〇万円となっている。

一九五九年（昭和三四）には図書館職員が増員され、十月には夜間開館も再開された。また、文献複写機の購入による複写サービスが開始された。社会学部移転後の閲覧室等の改修によって、閲覧室二九坪、閲覧席九〇席、書庫面積二七坪と拡張された。

千葉分館長が急逝された後を受けて、池田弘教授が分館長に就任したのが、一九五八年十一月である。麻布校舎は工学部が全面的に使えるようになったとはいえ、施設・校舎の老朽化等に対する不満は強くなるばかりであった。こうした中で、木月移転案が理事会から出されたが、工学部教授会、学生会の強い反対で断念され、新たな校地の取得に努力することとなった。